様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2009
課題番号：20791754
研究課題名（和文）　妊娠各期における夫の「親としての自己獲得」と妻と児、社会資源との関連
研究課題名（英文）　Acquisition of personality as a parent by husbands and the influencing factors at each stage of pregnancy, such as the relationship to the wife and fetus, and social resources

研究代表者
倉内　静香（KURAUCHI SHIZUKA）
弘前大学・大学院保健学研究科・助手
研究者番号：60455730

研究成果の概要（和文）：妊娠各期における夫の親としての自己獲得とその影響要因について明らかにすることも目的に調査を実施した。夫は妻よりも妊娠初期に「柔軟さ」、「自己の強さ」において親としての自己を獲得していたが、妊娠経過とともに妻よりも親としての自己を獲得していなかった。また夫の親としての自己獲得は、胎児、妻への愛着、そして妻の親としての自己獲得が関連していた。以上より、夫が妻だけでなく、胎児への愛着を持ち、胎児を含めた家族関係を構築できるよう妊娠早期から支援していくことが重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to clarify the relationship between a husband's acquisition of personality as a parent at each stage of pregnancy and the factors that influence such acquisition.
Husbands showed greater acquisition of personality as a parent in the aspects of "Flexibility" and "Strength of self" compared to the wife during the first trimester of pregnancy, but as the pregnancy progressed did not show any greater acquisition than the wife. Furthermore, the acquisition of personality as a parent by the husband was related to his bonding to the fetus, attachment to his wife, and the wife's acquisition of personality as a parent.
Societal support for a husband's attachment not only to his wife but also to the fetus from early pregnancy was found to be important for the building of family relationships.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学
キーワード：妊娠期の夫、親としての人格発達

１．研究開始当初の背景

わが国の少子高齢化や核家族化により、子どもと接する機会が少なく養育期を迎え、養育に関して悩みや不安を抱える母親が増えている。そのため幼児虐待など子どもを取り巻く環境は危機的状況にある。虐待する母親

の背景には、夫婦関係の情緒的問題や無理解、非協力的な父親の存在が指摘され[1]、妊娠期から母親のみならず父親を含めた「親となることへの支援」の整備が必要不可欠である。Belsky[2]は、子どもの妊娠から出生までに、親としての自己をどの程度獲得しているかが、出生後の養育行動に影響を与えると述べている。女性は、妊娠し自らの身体的変化に伴い親としての自己を獲得していく[3]とされているが、夫の親としての自己獲得は、妊娠期では妻よりも難しいとされている。

日本における母子保健施策は、女性の健康管理を含めた母子のための施策から、急激に進展する少子高齢化により、次世代育成の視点が含まれた施策へと変化し、社会全体で子どもが心身ともに健やかに育つための環境を整備することを課題として掲げている[4]。今日核家族で共働き世帯が増加している中で、子ども虐待など子どもの危機的状況を回避するために、夫の育児参加が見直されてきている。しかし、まだ夫の育児参加を促進するための環境は、改善されておらず特に妊娠期における支援は技術習得に終始しており、親としての自己の獲得を支援する環境を整備するには至らず、この整備が国の次世代育成のための重要な課題であると言える。

人格発達に関する研究は、アメリカを中心に 1980 年頃から盛んに行われ、男らしさや女らしさの性差による考えから、1 人の人間が性差によらず両方を持ち合わせることが必要であるという、アンドロジニー(両性具有性)の考えが生まれ[5]、男女を問わず目指すべき人間のあり方について研究が行われてきた。日本における研究は、性差による意識に関心が持たれ父性や父性意識の性別役割に関する研究が行われきた背景があり、妊娠期の父親の人格発達に関する研究を文献検索すると 10 件にもみたない。特に妊娠期における夫の人格発達過程を明らかにしている文献はなく、また夫の人格発達に影響する要因として、妻自身の人格発達状況を取り入れ考察している文献もない。そこで本研究が注目する新たな生命の誕生を通しての夫と妻の関係性から夫の人格発達過程を明らかにすることは重要であると考える。

(参考文献)

1) 高橋重宏・庄司順一編：福祉キーワードシリーズ 子ども虐待.第 3 版,14-15,中央法規出版株式会社,2004.
2) Jay Belsky:The determinations of parenting A process model. ChildDvelopment ,55 (1),83 - 96,1984.
3)ルヴァ・ルービン著/新道幸恵ら訳：ルヴァ・ルービン母性論　母性の主体的体験.第 1 版,45-61,医学書院,1997.
4)内閣府偏：少子化白書(平成 17 年版).第 1 版,196 - 212,ぎょうせい,2005.
5)Bem,S.L:Sex role adaptability One consequence of psychological andorogyny.Journal of Personality&Social Psychology,31 , 634-643,1975. Society. Guilford Press,1986.

２．研究の目的

本研究では、妊娠期における夫を対象とし、縦断的、横断的調査を行い、夫の親としての自己の獲得過程、またその過程に関係する要因について明らかにする。また、父親となる夫の情緒的反応は、妊娠各期の妻の身体的、精神的変化を通じて変化していることが明らかにされていることから、本研究では、妊娠期間を WHO が提唱する初期、中期、後期の 3 分とし、各期における夫の親としての人格発達段階を明らかにする。

３．研究の方法

(1)調査時期

2008 年 8 月～2010 年 1 月

(2)研究対象・方法

本研究は、自己記入式質問紙を用いた調査及びインタビューによる縦断的、横断的調査研究である。

青森県内の 2 市保健センターにおいて、母子健康手帳交付、母親学級や両親学級、産褥訪問指導において、妊娠期の妻とその夫、また産褥期の妻とその夫に、自己記入式調査票を配布し回収した(横断的調査)。

また、研究依頼時に継続調査(依頼後の妊娠時期において継続して質問紙を送付し回収する)に同意が得られ、インタビュー調査にも同意が得られた方を対象に、継続調査、可能な場合インタビューを実施した(縦断的調査)。

(3)調査項目

①調査票は、親としての自己獲得(以下、人格発達)尺度、胎児への愛着尺度、夫婦関係尺度、性役割観尺度の 4 つの尺度、属性を問う調査項目で構成されている。

人格発達尺度は、柏木ら[6]によって妥当性が検討された親となることによる人格発達の 49 項目を用いた。この尺度は、「柔軟さ」、「自己抑制」、「運命・信仰・伝統の受容」、「生き甲斐・存在感」、「自己の強さ」の 6 因子から構成され、対象者の主観的な認知状況を把握することができる。今回の妊娠を通しての変化を各項目について問うた。

胎児への愛着尺度は、佐々木[7]が作成した「胎児への関心」、「胎児への関わり行動」、「胎児存在の実感」、「育児準備」の下位項目からなる計 11 項目を用いた。

夫婦関係尺度は、大日向[8]の愛着尺度の「関

心」、「理解・支持」に関する 8 項目を夫婦間の愛着として用いた。また佐々木ら[9]が作成した6項目からなる夫婦間コミュニケーション尺度を夫婦間のコミュニケーション尺度とし、この2つの尺度を夫婦関係尺度とした。

性役割観尺度は、若松ら[10]が作成した既に妥当性と次元が確定されている「革新的・非伝統的性役割」に関する 10 項目を用い測定した。

各質問項目に4段階評定尺度で回答を求め、「全く思う」を4点、「全くそう思わない」を1点とし、各因子、また人格発達と胎児愛着尺度については全項目の合計値を算出した。

また属性については、先行研究を参考に、子どもに関する情報（出生順、性別、年齢）、就労形態など就労に関する情報、家族構成など属性を問う項目とした。

(参考文献)
6) 柏木惠子・若松素子著：「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み．発達心理学研究,5(1),72 - 83,1994.
7) 佐々木くみ子著：親となることによる人格的発達に関する研究　第1子妊娠期の父母について．母性衛生,46(1),62 - 68,2005.
8) 大日向雅美著：母性の研究.287 - 308,川島書店,1988.
9) 佐々木くみ子・植田彩他著：親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究．米子医学雑誌,55(2),142 - 150,2004.
10) 若松素子・小口菜採・柏木惠子著：Women’s Studies 研究報告Ⅷ 高学歴女性のキャリア・ディベロプメントに関する調査報告書．東京女子大学附属比較文化研究所,1988.

②インタビューによる調査

上記の調査票による継続調査に同意が得られ、産後1か月頃にインタビュー調査が可能である夫と妻、または妻のみに対し、半構造化面接を実施した。妊娠各期を振り返り、親としての新たな自己を認知した時やその時にどのようなことが影響していたかを問い、自由に思ったことを語ってもらうように説明しインタビューを実施した。

(4)倫理的配慮

弘前大学大学院医学研究科倫理委員会に申請し承認を受け調査を実施した。

対象者には研究の目的、自由参加であること、参加を拒否した場合でも何ら不利益を被らないこと、参加後にこれを撤回できること等を研究者より文書で説明の上調査を実施した。研究対象者への個人情報保護、また夫妻間のバイアスをなくすためにも、対象者が調査票に各自で回答後、別々の封筒に入れることができるように封筒を配布し、各封筒をさらに返信用封筒に入れて回収した。

回収した調査票は、研究者のみがわかる番号記名式にし、個人が特定されないように配慮した。調査票・インタビュー結果は、研究者が所属する研究機関において、施錠保管し、研究終了後には調査票はシュレッタにて廃棄、インタビューデータはすべて初期化することなど、個人情報の保護に万全の配慮を行うことを口頭または文書にて説明した。

調査票による調査参加者には、調査票の返送をもって同意を得ることを伝え、返送をもって同意を得た。またインタビューによる調査参加者には、同意書による同意を得て調査を実施した。

(5)統計解析及び内容分析の方法

データ解析には、統計ソフト SPSS17.0J を用い、夫妻間の比較には Wilcoxon 符号付順位検定、各期間比較には一元配置分散分析、多重比較には Bonferroni を用い、影響因子との関連については、重回帰分析(Stepwise 法)を用いた。$p<0.05$ 以下を有意水準とした。

４．研究成果

横断的調査、縦断的調査について別々に成果を述べる。

(1)横断的調査結果

妊娠期 1167 組、産褥期 448 組に調査票を配布し、妊娠期 457 組、産褥期 187 組から回答が得られ、有効回答が得られた妊娠初期 187 組、妊娠中期 96 組、妊娠後期 80 組、産褥期 167 組を分析対象とした。

妊娠初期の夫の年齢は 32.1±5.4 歳、妻は 30.6±4.6 歳、妊娠週数は 10.4±1.9 週であった。妊娠中期の夫の年齢は 32.5±5.2 歳、妻は 30.2±4.4 歳、妊娠週数は 20.9±3.4 週であった。妊娠後期の夫の年齢は 32.5±5.1 歳、妻は 30.5±4.7 歳、妊娠週数 30.9±3.9 週であった。産褥期の夫の年齢は 33.1±5.6 歳、妻は 31.1±4.5 歳、産後 9.0±9.4 週であった。

社会資源(両親、母親教室)への参加ありの人(割合)は、妊娠初期の夫 26 名(13.9%)、妻 46 名(24.6％)、妊娠中期の夫 32 名(33.3%)、妻 65 名(67.7%)、妊娠後期の夫 53 名(66.3%)、71 名(88.8%)、産褥期の夫 86 名(51.5%)、140 名(83.8%)であった。

①各期における夫妻間の比較

妊娠初期では、表1に示すように、人格発達尺度の項目において、夫が妻より「柔軟さ」、「自己の強さ」の項目において有意に高い得

点であった。また、「運命・信仰・伝統の受容」の項目において、妻が夫より有意に高い得点であった。妊娠により、夫と妻の人格発達を感じている項目に相違が認められた。

胎児への愛着尺度においては、胎児への関心、関わり行動、合計値が夫より妻の得点が有意に高く妻が胎児への愛着をより持っていることが明らかとなった。

愛着尺度において、夫が妻よりも、妻に「してあげたい」という要求を示しており、逆に妻は夫よりも夫に「して欲しい」という要求が認められた。

		妊娠初期 N=187				
		夫			妻	
		M ± SD			M ± SD	
人格発達尺度	人格発達尺度　合計値	98.67	±	33.36	98.06	± 31.51
	柔軟さ	12.36	±	5.03	* 11.30	± 3.90
	自己抑制	16.59	±	6.45	16.57	± 6.01
	視野の広がり	19.27	±	7.68	19.83	± 7.04
	運命・信仰・伝統の受容	14.43	±	5.65	* 15.75	± 5.95
	生き甲斐・存在感	26.64	±	9.13	26.25	± 9.26
	自己の強さ	9.38	±	3.96	* 8.35	± 3.28
胎児への愛着尺度	胎児への愛着尺度　合計値	29.29	±	6.46	* 30.52	± 5.66
	胎児への関心	6.40	±	1.43	** 6.77	± 1.31
	胎児への関わり行動	4.95	±	1.85	** 5.53	± 1.59
	胎児存在の実感	7.36	±	2.42	7.21	± 2.27
	育児準備	10.58	±	3.19	11.01	± 3.11
夫婦関係尺度	夫婦間のコミュニケーション	19.58	±	3.61	19.91	± 3.63
	愛着要求(e)	15.03	±	1.66	* 14.68	± 1.72
	愛着要求(w)	13.44	±	2.28	** 14.60	± 1.83
革新的・非伝統的性役割観		24.48	±	4.85	25.06	± 4.47

・Wilcoxon符号付順位検定
・*：p<0.05、**：p<0.01

表１　妊娠初期における夫妻間の比較

妊娠中期では、表２で示すように、人格発達尺度において夫が有意に高い得点は認められず、「人格発達尺度　合計値」、「視野の広がり」、「運命・信仰・伝統の受容」において妻が夫より有意に高い得点であった。

胎児への愛着尺度の項目においてはすべての項目で夫より妻の得点が有意に高かった。また愛着尺度では、妻が夫に対して「して欲しい」という要求を示していた。

		妊娠中期 N=96				
		夫			妻	
		M ± SD			M ± SD	
人格発達尺度	人格発達尺度　合計値	104.52	±	35.81	* 112.54	± 26.91
	柔軟さ	13.71	±	5.69	13.80	± 4.53
	自己抑制	17.67	±	6.49	19.00	± 5.54
	視野の広がり	20.13	±	7.71	* 22.58	± 6.36
	運命・信仰・伝統の受容	15.58	±	6.10	** 17.80	± 4.96
	生き甲斐・存在感	27.76	±	9.42	29.59	± 7.73
	自己の強さ	9.68	±	3.92	9.76	± 3.24
胎児への愛着尺度	胎児への愛着尺度　合計値	33.67	±	7.07	** 36.07	± 5.37
	胎児への関心	6.54	±	1.41	** 7.04	± 1.10
	胎児への関わり行動	5.92	±	1.80	* 6.44	± 1.36
	胎児存在の実感	9.16	±	2.42	* 9.83	± 1.93
	育児準備	12.05	±	3.31	* 12.76	± 2.82
夫婦関係尺度	夫婦間のコミュニケーション	19.65	±	3.51	20.06	± 3.04
	愛着要求(e)	15.01	±	1.57	15.04	± 1.40
	愛着要求(w)	13.50	±	2.31	** 14.58	± 1.86
革新的・非伝統的性役割観		24.74	±	5.23	25.05	± 4.90

・Wilcoxon符号付順位検定
・*：p<0.05、**：p<0.01

表２　妊娠中期における夫妻間の比較

妊娠後期では、表３で示すように、人格発達尺度の項目において夫妻間に有意差は認められなかった。胎児愛着尺度においても夫が妻よりも有意に高い項目が多かった。また愛着尺度では、妻が夫に対して「して欲しい」という要求を示していた。愛着尺度の愛着要求(w)については、妊娠各期を通して同じ結果であり、妻が夫より有意に高い得点であった。

		妊娠後期 N=80				
		夫			妻	
		M ± SD			M ± SD	
人格発達尺度	人格発達尺度　合計値	115.65	±	37.00	116.71	± 31.02
	柔軟さ	15.33	±	5.50	14.58	± 4.71
	自己抑制	19.41	±	6.63	19.48	± 5.59
	視野の広がり	23.03	±	8.25	24.60	± 6.96
	運命・信仰・伝統の受容	17.25	±	6.43	17.79	± 5.97
	生き甲斐・存在感	30.08	±	9.55	30.81	± 8.79
	自己の強さ	10.56	±	4.29	9.46	± 3.52
胎児への愛着尺度	胎児への愛着尺度　合計値	36.68	±	5.97	* 38.59	± 4.71
	胎児への関心	6.75	±	1.20	** 7.25	± 1.04
	胎児への関わり行動	6.43	±	1.52	6.69	± 1.33
	胎児存在の実感	10.30	±	1.81	* 10.78	± 1.40
	育児準備	13.20	±	3.00	13.88	± 2.51
夫婦関係尺度	夫婦間のコミュニケーション	20.16	±	3.70	20.71	± 3.43
	愛着要求(e)	14.80	±	1.89	15.14	± 1.87
	愛着要求(w)	13.75	±	1.97	** 14.71	± 1.77
革新的・非伝統的性役割観		24.58	±	5.16	25.00	± 4.75

・Wilcoxon符号付順位検定
・*：p<0.05、**：p<0.01

表３　妊娠後期における夫妻間の比較

産褥期では、表４に示すように、人格発達尺度では「」「人格発達尺度　合計値」、「自己抑制」、「視野の広がり」、「運命・信仰・伝統の受容」、「生き甲斐・存在感」の項目において夫が妻よりも有意に高い得点を示していた。

妊娠期を振り返り、胎児への愛着をどの程度持っていたかを問うた項目においてもすべての項目において夫が妻よりも有意に高い得点であった。また愛着尺度では、妊娠各期と同様に、妻が夫に対して「して欲しい」という要求を示していた。

革新的・非伝統的性役割観の項目では、夫より妻が有意に得点が高く、妻がより性差による性役割観ではない価値観を持っていることが示された。

		産褥期 N=167				
		夫			妻	
		M ± SD			M ± SD	
人格発達尺度	人格発達尺度　合計値	113.77	±	34.13 **	124.34	± 29.15
	柔軟さ	15.17	±	5.51	15.29	± 4.84
	自己抑制	19.10	±	6.44 **	21.23	± 6.02
	視野の広がり	22.04	±	7.10 **	25.29	± 6.48
	運命・信仰・伝統の受容	16.32	±	5.91 **	18.79	± 5.58
	生き甲斐・存在感	30.73	±	9.15 **	33.46	± 8.13
	自己の強さ	10.41	±	4.03	10.29	± 3.52
胎児への愛着尺度	胎児への愛着尺度　合計値	32.98	±	6.12 **	36.25	± 4.94
	胎児への関心	6.75	±	1.15 **	7.23	± 1.04
	胎児への関わり行動	5.95	±	1.56 **	6.47	± 1.37
	胎児存在の実感	9.28	±	1.91 **	10.04	± 1.77
	育児準備	10.99	±	3.05 **	12.52	± 2.56
夫婦関係尺度	夫婦間のコミュニケーション	19.23	±	3.60	19.67	± 3.99
	愛着要求(e)	14.75	±	1.93	14.93	± 1.77
	愛着要求(w)	13.49	±	2.67 **	15.03	± 1.40
革新的・非伝統的性役割観		23.99	±	4.67 *	24.98	± 4.64

・Wilcoxon符号付順位検定
・*：p<0.05、**：p<0.01

表４　産褥期における夫妻間の比較

②夫の親としての自己獲得と影響要因との関連

夫の人格発達尺度の合計値を従属変数とし、夫の胎児への愛着尺度、夫婦関係尺度、性役割観、妻の人格発達尺度、愛着尺度、夫婦関係尺度、性役割観の各因子を独立変数と

して重回帰分析を実施した。表５にその結果を示す。

夫の人格発達の各期において、共通して正相関に影響する因子として、胎児への愛着尺度の下位因子である胎児への関心や存在の実感、関わり行動などがあげられ、夫が胎児への愛着を認識することが親としての自己獲得を促進することが明らかとなった。

また妊娠初期においては、夫が妻に対し「してあげたい」という愛着要求と夫の人格発達が負相関であることが示された。そして産褥期においては、妻の妊娠期の胎児への関わり行動と夫の人格発達が負相関であることが示された。このことは、夫の愛着の方向が妻に向けられているが、妻の愛着は胎児に向けられ、そのことが夫の親としての自己獲得を促進しない因子となっていると考えられた。

以上より、夫は親としての自己を獲得するためには、妻と同様に胎児を実感し、胎児に対して愛着を形成することができるように支援することが重要であると考えられた。

また夫の親としての自己獲得は、妻の人格発達の「自己抑制」、「運命・信仰・伝統の受容」が特に影響していることが示され、妊娠期の夫妻間の比較において妻が夫より獲得していた「運命・信仰・伝統の受容」が影響していた。このことから、妻が妊娠により獲得することができる「運命・信仰・伝統の受容」について、夫婦間のコミュニケーションを通して共有することが、夫の親としての意識を高め、夫の親としての自己獲得につながるのではないかと考えられた。

	決定係数 (R^2)		独立変数	標準化係数 (β)
妊娠初期	0.386 **	夫	胎児への関心	0.27 **
		夫	胎児存在の実感	0.316 **
		妻	自己抑制	0.196 **
		夫	育児準備	0.194 **
		夫	愛着要求(e)	−0.125 *
妊娠中期	0.353 **	夫	育児準備	0.371 **
		妻	運命・信仰・伝統の受容	0.233 **
		夫	愛着要求(w)	0.187 *
		夫	胎児への関わり行動	0.192 *
妊娠後期	0.499 **	夫	育児準備	0.358 **
		妻	運命・信仰・伝統の受容	0.351 **
		夫	胎児への関心	0.292 **
産褥期	0.408 **	夫	胎児存在の実感	0.298 **
		夫	夫婦間のコミュニケーション	0.153 *
		妻	運命・信仰・伝統の受容	0.226 **
		妻	胎児への関わり行動	−0.174 **
		夫	愛着要求(w)	0.18 *
		夫	育児準備	0.172 *

・重回帰分析(Stepwise法)
・*：p<0.05、**：p<0.01

表５　妊娠各期、産褥期における夫の親としての自己を説明する因子について

(2)縦断的調査結果

継続調査に同意が得られた124組に対し調査を実施し、その中でも妊娠初期から産褥期の４期間回答が得られた32組、そのうち有効回答が得られた21組を分析対象とした。またインタビューを実施した４組、妻のみ１名のインタビュー結果を踏まえ(初産４組、経産１組)、縦断的調査結果について述べる。

分析対象とした21組の妊娠初期の夫の年齢は31.8±4.7歳、妻は30.7±4.9歳であった。妊娠週数は、妊娠初期11.2±2.9週、妊娠中期20.0±3.4週、妊娠後期29.2±5.5週、産褥期は産後8.6±9.6週であった。

①夫、妻の親としての自己獲得過程

夫、妻とも４期間に有意差は認められなかったが、妊娠経過が進むにつれて各項目の得点が高くなる傾向がみられた(表６)。

		妊娠初期 M ± SD	妊娠中期 M ± SD	妊娠後期 M ± SD	産褥期 M ± SD	4期間比較 p
夫	人格発達尺度　合計値	114.10 ± 35.86	120.24 ± 34.53	124.48 ± 34.13	134.52 ± 36.80	0.30
	柔軟さ	14.48 ± 6.35	15.67 ± 5.84	16.86 ± 4.96	18.19 ± 6.33	0.21
	自己抑制	19.71 ± 6.77	20.52 ± 6.81	21.24 ± 6.39	23.29 ± 7.58	0.38
	視野の広がり	23.33 ± 7.81	23.38 ± 6.70	24.24 ± 6.94	26.29 ± 7.04	0.50
	運命・信仰・伝統の受容	15.81 ± 6.44	18.29 ± 6.49	18.76 ± 6.40	19.00 ± 6.33	0.36
	生き甲斐・存在感	30.43 ± 9.04	31.71 ± 9.27	32.81 ± 9.46	36.24 ± 8.43	0.20
	自己の強さ	10.33 ± 4.48	10.67 ± 3.50	10.57 ± 3.88	11.52 ± 4.09	0.79
妻	人格発達尺度　合計値	99.29 ± 35.23	112.62 ± 33.16	112.76 ± 33.17	122.62 ± 40.00	0.21
	柔軟さ	11.52 ± 4.80	14.33 ± 5.18	14.67 ± 5.30	15.14 ± 5.70	0.12
	自己抑制	17.67 ± 6.50	19.14 ± 5.50	19.57 ± 5.71	20.81 ± 8.12	0.48
	視野の広がり	20.62 ± 8.05	22.33 ± 6.72	22.76 ± 7.07	25.43 ± 8.36	0.24
	運命・信仰・伝統の受容	15.33 ± 6.51	17.19 ± 5.52	16.57 ± 5.59	18.29 ± 7.25	0.49
	生き甲斐・存在感	26.05 ± 9.85	30.10 ± 9.73	30.00 ± 9.12	32.71 ± 10.12	0.18
	自己の強さ	8.10 ± 3.46	9.52 ± 3.60	9.19 ± 3.88	10.24 ± 3.94	0.31

・一元配置分散分析

表６　夫、妻の人格発達尺度における４期間の比較

夫妻間の比較の結果について表７に示す。人格発達尺度は、妊娠初期に夫が妻よりも有意に「柔軟さ」、「自己の強さ」の項目について得点が高く、それ以外の期間において夫妻間に有意差は認められなかった。

	妊娠初期 夫 M ± SD		妻 M ± SD	妊娠中期 夫 M ± SD	妻 M ± SD
人格発達尺度　合計値	114.10 ± 35.86		99.29 ± 35.23	120.24 ± 34.53	112.62 ± 33.16
柔軟さ	14.48 ± 6.35	*	11.52 ± 4.80	15.67 ± 5.84	14.33 ± 5.18
自己抑制	19.71 ± 6.77		17.67 ± 6.50	20.52 ± 6.81	19.14 ± 5.50
視野の広がり	23.33 ± 7.81		20.62 ± 8.05	23.38 ± 6.70	22.33 ± 6.72
運命・信仰・伝統の受容	15.81 ± 6.44		15.33 ± 6.51	18.29 ± 6.49	17.19 ± 5.52
生き甲斐・存在感	30.43 ± 9.04		26.05 ± 9.85	31.71 ± 9.27	30.10 ± 9.73
自己の強さ	10.33 ± 4.48	*	8.10 ± 3.46	10.67 ± 3.50	9.52 ± 3.60

	妊娠後期 夫 M ± SD	妻 M ± SD	産褥期 夫 M ± SD	妻 M ± SD
人格発達尺度　合計値	124.48 ± 34.13	112.76 ± 33.17	134.52 ± 36.80	122.62 ± 40.00
柔軟さ	16.86 ± 4.96	14.67 ± 5.30	18.19 ± 6.33	15.14 ± 5.70
自己抑制	21.24 ± 6.39	19.57 ± 5.71	23.29 ± 7.58	20.81 ± 8.12
視野の広がり	24.24 ± 6.94	22.76 ± 7.07	26.29 ± 7.04	25.43 ± 8.36
運命・信仰・伝統の受容	18.76 ± 6.40	16.57 ± 5.59	19.00 ± 6.33	18.29 ± 7.25
生き甲斐・存在感	32.81 ± 9.46	30.00 ± 9.12	36.24 ± 8.43	32.71 ± 10.12
自己の強さ	10.57 ± 3.88	9.19 ± 3.88	11.52 ± 4.09	10.24 ± 3.94

・Wilcoxon符号付順位検定
・*：p<0.05、**：p<0.01

表７　各期における夫妻間の比較

継続調査のデータからは親としての自己獲得に変化が認められなかった。その原因として、21名のみのデータを分析対象としていることも影響していると考えられるが、インタビュー調査を実施した結果においては、妊娠経過を通しての変化が認められ、親としての自己を獲得するきっかけとなる内容が明らかとなった。

妻は妊娠初期からつわりにより胎児を実感でき、体調管理に心掛け、「この子どもを守らなければ」という思いや、周囲の子ども達が気になるようになり、自分の子どものしつけにも関心が向けられ「自分がしっかりし

ないと」という親としての自己を考える機会が多くなっているようであった。それに対して夫は、妊婦健診でのエコー写真をみたり、妻から話を聞くなどするが、胎児の実感は難しく、しかし、「流産をしないように家事を手伝った」、「転んだりしないで、体調に気をつけて」、「健診どうだった？」など妻への配慮が見られるなどの変化があった。

また妊娠中期になるにつれ、妻はつわりから解放され、胎動がわかるようになると自分自身で胎児の状態を把握することができ、安堵感が生まれていた。またお腹をかばったり、食事など子どもに良いものを摂るようにしたりと胎児への配慮が妊娠初期よりも具体的な言葉として語られた。また夫も、胎動を通して、胎児の存在を感じることができ、子どもの顔や、抱っこ、オムツ交換などを空想するようになったと語る夫もいた。つまり、夫は妊娠中期では親としての意識を胎児の存在を通して実感していた。

そして妊娠後期になると、妻は具体的に出産に対しての思いが中心となり、「早く会いたい」、「出産の兆候を感じ取ることができるのか不安」などが語られた。一方、夫は子どもの名前について関心を持ち、その子どもの将来のことを考えて名前をつけることで親になるという意識を感じていた方が多かった。

以上より、夫は開始時期は多少妻よりも遅いが、妊娠経過を通して親としての意識の変化を妻や胎児との関わりの中で感じ取っていた。しかし、具体的に意識を感じとった結果として、親としての自己とは何かについて言葉として語る方は少数であった。特に経産の方は、第2子の妊娠を通して、さらに親としての自己を獲得すると共に、新たに親としての自己を意識として感じたことを語る場面からも発展させて、親としてどうあるべきかを語る場面が多かった。また初産の方でも、妊娠をきっかけに子どものしつけについて夫婦間で話し合い、育児方針を決めたりするなど親としての子育てをどうしていくべきかを妊娠期より準備していた。一方でインタビュー調査終了時に、妻が「夫がそういう風に妊娠期の時に感じ、子育てについて考えていたのか知らなかった。知れて良かった。」という方もいた。また「出産で一区切りだと思っていたけど、産後の育児も大変だということが今(出産後)になって感じている」と語る初産婦に方も数名いた。

以上のことからも、親としての自己を意識するきっかけやそのことを通して今後生まれてくる子どもについて夫婦間で話し合うという機会を設け、妊娠期から産後、育児について目を向けることができるように支援していくことが必要であることがインタビュー結果より明らかとなった。

(3)まとめ

横断的調査、縦断的調査により夫の親としての自己獲得過程とその影響要因について以下のことが明らかとなった。

・夫の親としての自己獲得は、妻の妊娠、胎動という機会、親としての自己を獲得し始めた妻が、親としての自己獲得のきっかけとなっていることが明らかとなった。
・夫は、妊娠初期から妻よりも「柔軟さ」、「自己の強さ」について獲得していたが、妊娠経過とともに妻がより親としての自己を獲得していることが明らかとなった。
・夫の親としての自己獲得を促進する因子として、妻が妊娠各期において夫よりも獲得している「運命･信仰･伝統の受容」、また夫の胎児への愛着があげられた。
・夫の親としての自己獲得は、夫の妻への愛着、妻の胎児への愛着と関連が認められた。

今回本報告書には掲載していないが、継続調査において妊娠期と産褥期の2期間にわたり調査することができたケースについても今後検討し、経時的に夫妻の親としての自己獲得が変化しているのかについても明らかにしていきたいと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

1. 倉内静香、社会サービス活用の有無による妊娠期の夫の「親としての自己獲得」とのその影響要因、第 29 回日本看護科学学会学術集会、2009 年 11 月 28 日、幕張メッセ（千葉県）

６．研究組織

(1)研究代表者

倉内　静香（KURAUCHI SHIZUKA）
弘前大学・大学院保健学研究科・助手
研究者番号：60455730